

## [特別活動]

# ルールづくりやリレーションを深める活動が、学級づくりに与える影響と「真」の親和型学級について

— WEBQUの結果や児童の自己評価からの検証及び、不登校児童の存在から考える —

今井雄一郎\*

## 1 問題の所在

### (1) 学級集団における人間関係形成と学級活動について

学級集団とは、児童が課題の解決に向けて話し合いながら合意形成したり、方策を考えたりして相互作用し、よりよい人間関係を形成しながら、学習や学級活動に取り組んでいくものとする。小学校学習指導要領特別活動編(2018)<sup>1</sup>では、児童が集団において相互作用する「人間関係形成」について「集団の中で、人間関係を自主的、実践的によりよいものへと形成する」ものとしている。学級集団の中で行う「学級活動」については、「自治的」な活動であるとしながら、「学級や学校での生活をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成し、役割を分担して協力して実践したり、学級での話し合いを生かして自己の課題の解決及び将来の生き方を描くために意思決定して実践したりすることに、自主的、実践的に取り組むこと」を目標とし、その方策として、課題を見だしながら、振り返りを行って成果と課題を明らかにしていくとしている。

### (2) 学級経営における課題・自治的な学級集団「親和型」について

学級内における集団の雰囲気や児童の人間関係、相互作用に不調和が生じると、良好な人間関係を築くことが難しくなってしまう、いじめ等生徒指導上の問題が発生する可能性を高め、自治的な雰囲気とは程遠いものになってしまう。河村(2012)<sup>2</sup>は、良好な学級集団を育成するためには、段階的にルールとリレーションを確立させていく必要があるとし、それにより、児童の中に親和的な凝集性ができていくとしている。また、自治的な学級集団を「学級の問題を自分たちで解決でき、児童生徒が自他の成長のために協力できる状態」とし、学習に理想的な状態の学級集団を、自治的な学級集団である「親和型」としている。

### (3) 自治的で「親和型」の学級集団づくりについて

上記のような課題を解消し、前述のような自治的で「親和型」な学級集団を育成するためには、協働活動を通して児童が相互作用しながら課題を見だし、解決に向けた方策を考えていくことが重要である。さらに、リレーションを確立していくこと、児童自らルールを設定し、振り返りを通してルールを確立していくことなど、実践が各互恵的に作用していくことが自治的な学級集団の達成に向けて大切であると考えられる。以上の点からルールとリレーションを確立させながら、自治的で「親和型」の学級集団を育成していくための方策について、その有効性を検証していきたい。

## 2 研究の目的

ルールとリレーションを確立しながら自治的で「親和型」の学級集団を育成していく段階的な流れとして、河村(2012)が提唱する学級集団の状態「学級集団づくりの現実的な流れ [目安]」がある。これは、4月の「混沌・緊張期」の学級集団におけるルールの設定から、2学期以降の「自治的集団の成立」までの流れを段階的に現したものである。本研究では、河村が提唱する4月から2学期以降までの段階を基盤にし、児童の実態に合わせて考案した具体的実践が、親和型で自治的な学級集団の達成に有効であるか、WEBQUの結果や児童の振り返りから検証する。なお、今回調査対象とした学級には、不登校傾向の児童が在籍している。この児童を含めて「親和型」の学級集団づくりを目指した実践に取り組むことで、河村の提唱する自治的で「親和型」の学級集団と、「真」の親和型の学級集団とは何かについても考えていきたい。

\*南魚沼市立浦佐小学校

### 3 調査対象と検証方法

#### (1) 調査対象

M市立U小学校 第4学年 男子22名, 女子14名, 合計36名 (令和5年度)

前年度まで二学級であり, 実践を行った令和5年度から単学級となった。4月の時点では, 児童同士のトラブルがあり, 旧学級ごとに異なるルールが存在や, 学習や集団としてのルールが定着していない状態であった。

#### (2) 検証方法

4月から, 河村(2012)の提唱する学級集団の状態を基盤に, 児童の実態に合わせて独自に考案した協働活動やルールの設定, 課題解決に向けた活動, 振り返りなどの具体的実践が, ルールの内在化, リレーションの確立, 親和型で自治的な学級集団の達成に有効であるかを, 活動の様子と児童の振り返り, WEBQUの結果から検証する。同時に, 不登校児童の振り返りやWEBQUの結果, 学級集団との関係の実態から, 学級集団の親和型とは何かを考えていく。

### 4 実践

本実践を行った学級は, 前年度の二学級から単学級になったということもあり, それぞれの旧学級での異なる習慣が根付き, 学級のルールの内在化が難しい状態であった。そこで, 河村(2012)の提唱する学級集団の状態(「混沌・緊張期」~「自治的集団成立期」)を基に考えた6つの実践を, 「ルールの内在化」, 「リレーション」づくり, 「振り返り」の充実を目的として, 4月から7月まで取り組んだ。(表1)

表1 学級集団の状態(河村2012)と対応した実践

		学級集団の状態(河村2012)			
		4月	5月	6, 7月	2学期以降
		「混沌・緊張期」	「小集団成立期」	「中集団成立期」	「自治的集団成立期」
実践	ルールの内在化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級目標を決めよう(実践1)</li> <li>・クラスのルールを決めよう(実践2)</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラスの課題を学級会で話し合おう(実践5)</li> </ul>	
	リレーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ほめほめタイム(実践3)</li> <li>・係活動を計画しよう(実践4)</li> </ul>			
	振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラスのレベルを振り返ろう(実践6)</li> </ul>			

#### (1) 実践1 学級目標を決めよう

4月に学級づくりを始めるにあたり, 児童に1年間大切にしたい3観点(フォロワー, 認め合いはリレーションの項目, チャレンジは主体性の項目)を教師側から具体例を挙げながら示し(表2), その観点を基に, 学級目標を決めるための話し合いを実施した。児童は, 自分達でどのような学級をつくりたいかを考え, 学級目標に入れたいキーワードを付箋に書き, 観点ごとにまとめた。付箋には, 表3のキーワードが書かれており, 新しい学級のスタートに向けた思いや決意が見られた。

#### (2) 実践2 クラスのルールを決めよう

河村(2022)<sup>3</sup>は, 自治的な学級集団におけるルールとの関係について, 「学級のルールが児童生徒に内在化され, 一定の規則正しい全体生活や行動が, 温かな雰囲気なかで展開されます」としている。児童が主体的に学級のルールに従い, リレーションを深めていくことが大切である。しかし, 学級におけるルールが教師からの一方的な提案になってしまうのは, 児童にルールを内在化させることは難しい。そこで, 学級目標を達成し, 温かな雰囲気皆が安心して生活するために必要なものは何かを児童に問いかけ, 学級のルールについて話し合った。自分達の目標達成に向け, 児童らは「生活」「学習」「ほめほめ」という3観点で, 学級会を通して学級のルールを設定した。(図1)

表2 4月に示した3観点

3観点	具体的な姿
フォロワー	仲間を信じ, フォローする
チャレンジ	進んで行動する 自分から挑戦する
認め合い	相手の良いところを見つける 温かい言葉で感謝する

表3 付箋に書かれたキーワード(一部抜粋)

フォロワー	チャレンジ	認め合い
<ul style="list-style-type: none"> <li>・みんなを支える</li> <li>・人の目を見て聞く</li> <li>・優しくする</li> <li>・ありがとう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・挑戦</li> <li>・前に進む</li> <li>・全力でやる</li> <li>・あきらめない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やさしさ</li> <li>・いいね</li> <li>・ほめる!</li> </ul>

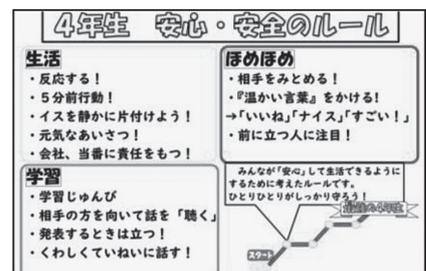


図1 クラスのルール

(3) 実践3 ほめほめタイム

温かな学級集団づくりには、児童が互いに良さを認め合い、自己肯定感や有用感を高めることが大切である。

良好な人間関係とリレーションを確立させていくことを目指し、学級目標決め、ルールづくりと並行して、毎日の帰りの会で、「ほめほめタイム」を実施した。この取組は、その日1日を振り返り、学級の友達の頑張った点や良かった点を捉え、カード(図2)に記述し、相手を認める言葉を添えながら渡し合うものである。なお、児童には、「仲間を認め、自分や相手の良さを引き出すため」と、事前に活動の目的を伝えた。

実際の活動で児童らは、「今日の算数の時間にたくさん発言していたね。すごい」、「体育の授業で水泳をがんばっていたね」など、互いに相手の頑張りを認める発言をしながらカードを渡す様子が見られた。この取組は、3学期終業式まで継続して実施した。

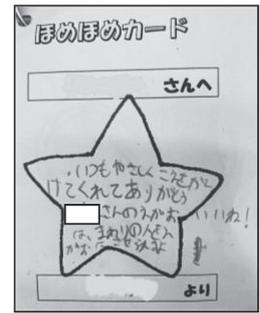


図2 ほめほめカード

(4) 実践4 係活動を計画しよう

5月「小集団成立期」から、6、7月の「中集団成立期」にかけて、係活動を小集団の1つと位置付け、集団内の児童が互いに意見を交流しながらリレーションを深めていくことを目指した。さらに、係活動において、「いつ」「どこで」「何を」という活動の視点をもちながら、PDC Aサイクルを実践していくことで、児童らが自ら課題を見つけ出し、解決に向けて活動を考えるという、自治的な学級集団の基礎を培うことを目指した。児童らは、学級が一つにまとまり、皆で関わる機会をつくりたいという思いから、各種イベントを提案し、休み時間に取り組んだ。活動では、新聞係が学級新聞を作成したり、イラスト係が学級のオリジナルキャラクターを作ろうと皆に募集したりするなど、意欲的な活動が多く見られた。(表4)

表4 係が提案した各種イベント(一部)

イベント係	・ドッジボールイベント ・大根抜きイベント
本係	・おすすめの本紹介 ・読み聞かせイベント
イラスト係	・オリジナルキャラクター募集 ・クラス漫画掲載
生活係	・生活目標づくり ・あいさつイベント
新聞係	・学級新聞づくり(月1発行)
お笑い係	・お笑いライブ

(5) 実践5 クラスの課題を学級会で話し合おう

自治的な学級集団の達成に向け、「一人一人が気を付けること」という議題で、課題の共有と解決策を話し合う学級会を開催した。学級の課題は、実践2で作成したクラスのルールを振り返る中で児童が提案し、議題とした。児童らは「手を止めて相手に注目する」「相手のことを考えて行動する」という目標を設定した。この取組が後に係活動でも課題を見つける取組として、児童が自主的に取り組むことに繋がった。



図3 点数の掲示

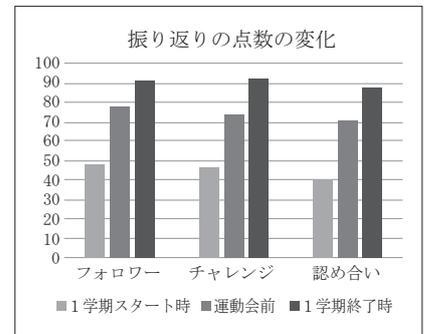


図4 振り返りの点数の変化

(6) 実践6 クラスのレベルを振り返ろう

児童が学級の状態を客観視できるよう学級全体の様子を点数化した。各児童が3観点を視点に自己評価(点数化)し、学級全体で平均値を出し、図3のように教室に掲示した。1学期における点数の振り返りは、全3回(1学期スタート時、運動会前、1学期終了時)行った。

学級全体での振り返りの点数は、図4のような上昇が見られた。

5 1学期WEBQUの結果と課題、2学期に向けた方策

(1) 1学期WEBQUの結果から見てきた児童の課題

上記の取組の中、1学期(令和5年5月24日)に実施したWEBQUでは、「親和型」の結果となった(図5)。しかし、7名の児童が「学級生活不満足群」に属しており、その内2名はインクルーシブライン外でもあった。また、「非承認群」に属した児童も1名いた。

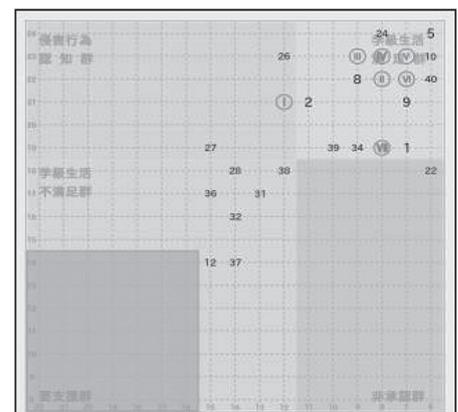


図5 1学期WEBQUの結果

1学期WEBQUの結果において、「学級生活不満足群」に属した7名の児童の内、4名の児童（抽出児童A B C D）は、同時期（運動会実施前）に取り組んだ3観点での振り返り（実践6）においても、1学期終了時には、高評価となっているが、WEBQU実施時（運動会前）では、友達との関係（リレーション）に関する振り返り項目「フォロワー」「認め合い」の2観点において、低い点数を振り返る傾向が見られた。（表5）自らの取組や学級への取組についてもマイナスの評価をする様子が見られた。いずれの児童も熱心に学級活動に取り組んでいたが、振り返るにあたり、客観的な評価ができなかったと考えられる。「学級生活不満足群」に属した児童のうち、1名を抽出児童E（不登校傾向）とし、後述する。

表5 1学期WEBQU「学級生活不満足群」に属した抽出児童の振り返り（1学期）

児童	フォロワー			認め合い		
	1学期スタート時	運動会前	1学期終了時	1学期スタート時	運動会前	1学期終了時
A	20点	50.3点	90点	9点	50.1点	90点
B	5点	50点	90点	5点	30点	50点
C	15点	75点	80点	5点	50点	92点
D	30点	72.2点	87点	50点	67.3点	81点

## (2) 2学期の方策と取組の様子

抽出児童の振り返りは、1学期終了時点で上昇したが、学級集団の状態を示す1学期WEBQUの結果を受け、2学期の取組として、以下の実践7～9を新たに設定した。なお、実践3～6は継続して実施した。

### ① 実践7 「ふりかえりの視点」の設定

先述の通り、1学期WEBQUの結果や振り返りから、自己評価を行う際に、それまでの取組と自分達の様子について客観的に判断できていない上に、児童ごとの評価基準が異なっている状態にあると考えた。そこで、3観点について、具体的かつ共通の評価基準を設定するための学級会を行った。そこで、「フォロワー」「チャレンジ」「認め合い」の具体的な行動目標について話し合い、「ふりかえりの視点」として設定した。（図6）

	◎	○	△
フォロワー	リーダーにしたがって、フォローしている。	言われたことを、とやまぜやする。	無視
チャレンジ	新しいことに、進んで挑戦	仲間にすすめられて挑戦	やらない
認め合い	ナイス、いいね、温かい言葉	協力	無視、人任せ

図6 ふりかえりの視点

### ② 実践8 「ほめほめタイム」の修正と、ほめほめカードにおける具体的場面の設定

(1)で述べた通り、1学期WEBQUの結果において、「学級生活不満足群」や「非承認群」に所属している児童は、いずれも学級生活において、アイデアを出しながら積極的に活動しているにも関わらず、自らを低く評価している傾向が見られた。日々の生活場面における努力や取組を他者から肯定的かつ具体的な場面を出して評価してもらうことで、児童が自らの生活を肯定的に自己評価できるようになるのではないかと考えた。そこで、帰りの会での「ほめほめタイム」の取り組み方を修正し、具体的場面と、そのときの良かった様子を伝える取組を取り入れることとした。実際の取組では、肯定的な声掛けに加え、抽出児童Eが出席した際も、「体育の授業ががんばっていたね」などと、温かい声掛けをする児童の姿が見られた。

### ③ 実践9 学級会による学級の課題の発見、ルールの再設定

1学期WEBQUの結果で「学級生活不満足群」「非承認群」に属す児童は、クラスとの関わりに関する「承認感」の項目で、否定的な回答をしていた。「親和型」の学級集団では、いずれの児童も学級生活で自分が受け入れられているという「承認感」や「安心感」を感じる事が大切だと考えた。

2学期の開始にあたり1学期を振り返り、学級の課題について児童に投げかけたところ、児童から学級会の開催を希望する提案があり、具体的な行動目標を設定させる学級会を実施した。（1学期に、実践5の議題の他にも、「お楽しみ会に何をしよう」といった議題の学級会も開催しており、取組が定着していたと考えられる。）「2学期はどんなことに気を付けて生活しようかな」という議題で行い、児童らは、2学期の取組として、「誰かが前に立ったら手を止める」「会社や当番に責任をもつ」「時間に気を付ける」とルールを設定した。1学期の取組を反省しながら、2学期の行動目標を設定するために、学級全体で探究する様子が見られた。1学期中にルールが内在化したことにより、自分達が目指す姿を考え、課題を挙げる事ができたと考えられる。

## 6 2学期WEBQUの結果

2学期（令和5年10月24日）に実施したWEBQUも、「親和型」の結果となり、学級集団が全体的に右上に推移、抽出児童A、B、C、Dともに、「友人との関係」「学級との関係」「承認感」の合計得点が上昇した。

（表6）1学期からの実践や、実践7、実践8、実践9によって抽出児童の自己肯定感や承認感が高まったためと考えられる。さらに、全児童がインクルーシブライン内という結果となった（図7）。1学期のWEBQUで「学級生活不満足群」に属していた児童7名の内、4名が「学級生活満足群」へと移行した。（※不登校により抽出児童E未実施）1学期に「非承認群」に属した児童も「学級生活満足群」に移行、1学期に「学級生活不満足群」に属した児童（抽出児童A、B、C、D）4名の内、2名が「学級生活満足群」に属した。WEBQU実施時期と同時期（学習発表会後）に実施した3観点の振り返り（2学期は全3回実施）では、抽出児童4名とも、振り返りの点数が1学期（運動会前）を上回る結果となった。（表7）しかし、新たに「非承認群」となった児童も3名見られた。

表6 抽出児童のWEBQUの合計得点の変化

児童	友人との関係		学級との関係		承認感	
	1学期	2学期	1学期	2学期	1学期	2学期
A	10点	12点	10点	12点	17点	21点
B	8点	10点	9点	11点	16点	16点
C	9点	11点	8点	12点	17点	21点
D	10点	12点	9点	12点	14点	22点

## 7 実践4のその後について

1学期に引き続き、2・3学期も実践4を継続して行い、学期が進むにつれ、児童らは、自ら課題を見つけ出し、新しい取組を進めていくようになった。例えば、3学期の国語科「調べたことを報告しよう」（「新しい国語・東京書籍」）の単元において、テーマを決めてアンケートを作成し、調査を行った活動をきっかけに、係活動においても、アンケートを作成して、学級の児童から課題やテーマについての調査を行う動きが見られた。他にも、「おなやみ相談BOX」という、学級の課題を集めて学級会に繋げ、解決していこうとする取組も始まるなど、（図8）継続して行った学級会や観点による自己評価、PDCAサイクルによって、課題解決をしようとする力が発揮されたと考えられる。さらに、各行事（新潟市見学・親善大会壮行式・学習発表会・学級仕舞い）で実施したプロジェクトでも成果が見られた。「学級仕舞いプロジェクト」では、自分達ができることを考え、校舎を清掃したり、「先生たちと対決イベント」を実施したりした。休み時間に、別室で活動する抽出児童Eに対して参加を提案する児童も見られた。

## 8 振り返りについて

3学期においても、引き続き3観点の振り返りの実施を継続して行った。3学期は、M市においてのWEBQUの実施がないため、関係を考察することはできないが、3学期開始時に行った振り返りでは、抽出児童（A、B、C、D）の点数は、2学期に比較し、多少下がった様子も見られたが、1学期と比較し、高水準を保っていた。（表8）抽出児童Eに関しては、別室登校となったため、振り返りをする事ができなかった。

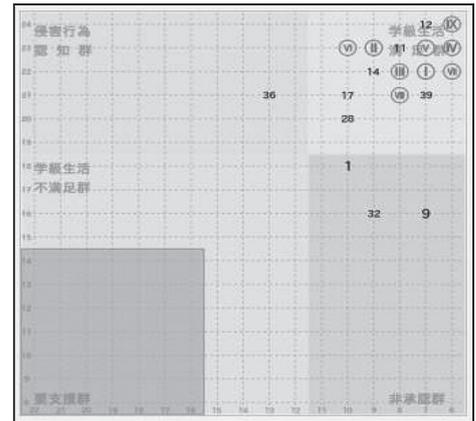


図7 2学期WEBQUの結果

表7 抽出児童の振り返りと1学期との比較

児童	フォロワー		認め合い	
	1学期	2学期	1学期	2学期
A	50.3点	100点	50.1点	95点
B	50点	99.9点	30点	100点
C	75点	97点	50点	95点
D	72.2点	100点	67.3点	100点

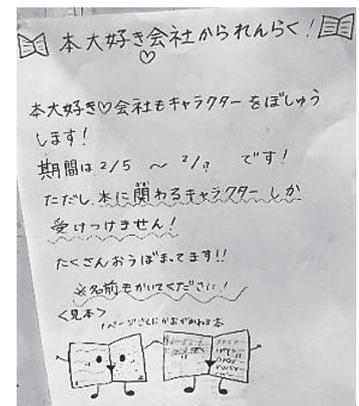


図8 係の宣伝ポスター

表8 抽出児童の振り返り（3学期）と1・2学期との比較

児童	フォロワー			認め合い		
	1学期	2学期	3学期	1学期	2学期	3学期
A	50.3点	100点	90点	50.1点	95点	99点
B	50点	99.9点	100点	30点	100点	85点
C	75点	97点	85点	50点	95点	90点
D	72.2点	100点	95点	67.3点	100点	97点

表9 抽出児童Eの振り返り

	フォロワー	認め合い
運動会前	90点	70点
2学期開始時	69点	66点

## 9 抽出児童Eについて

1学期WEBQUにおいて、「学級生活不満足群」に属した抽出児童Eは、前年度（令和4年度）より不登校傾向（欠席日数91日）であり、本実践を行った令和5年度の欠席日数は、96日間となった。

前年度も別室での学習が多く、本実践を行った令和5年度も、5月から学級での学習や活動に参加する回数が減り、1学期のWEBQUへの参加はできたものの、実践6の振り返りは、「運動会前」と「2学期開始時」のみとなった。

（表9）1学期のスタート段階である、運動会前の振り返りでは、比較的高い自己評価をしているものの、2学期開始時の振り返りでは、評価が下がっていた。さらに、1学期のWEBQUでは、「クラスの人から好かれ、仲間だと思われていると思う」という「友人との関係」に関する項目や、「運動や勉強、係などでクラスの人に認められている」という「承認感」に関する項目、「休み時間などに一人ぼっちでいることがある」という「いじめ・不登校」に関する項目で、否定的回答が見られた。上記の振り返りやWEBQUの結果、出席状況、学級内での様子から、抽出児童Eは、学級内における自らの自己評価が低く、周囲と対話することも難しくなっていたと考えられる。温和な雰囲気となった学級で、周囲の児童も気に掛け、別室や学級で活動した際に抽出児童Eに声を掛けながら接しようとしたが、それに対する返答も少なく、関わることができない様子であった。段階的に学級へ参加することを目指し、週的目標を設定して保護者や担任と一緒に毎日振り返るカード（図9）も活用したが、振り返ることができず、別室において担任や通級指導教室担当者と一緒に予定や活動の流れを話し合った際も、こちらの問いや提案に答えたり、自分の思いを伝えたりすることができなかった。令和6年度4月より、特別支援学級在籍となり、その後も交流学級には入ることができず、支援学級担任と登校時間を相談しながら特別支援学級で活動している。

今日の目標		1/20	1/21	1/22	1/23	1/24	1/25
達成した							
達成できなかった							

振り返り よくできた (◎)    できた (○)    できなかった (△) (□)

出席日数  
欠席日数

図9 振り返りカード

## 10 全体のまとめと考察

「親和型」の学級集団育成を目指した学級づくりでは、河村（2012）が提唱する学級集団の状態を大枠の基盤とし、児童の実態を見取りながら、ルールを設定したり、リレーションを深めたりする活動、振り返りと課題の探究、解決を行う活動を工夫しながら進め、実践を相互に作用させていくことが大切である。その中で、WEBQU等の結果を受け、学級の状態に最適な実践を改善しながら織り込み、担任の工夫や児童の声を織り込んで学級づくりを進めることが、「親和型」の学級集団の達成に繋がる。本研究で行った9つの実践が、WEBQUの「友人との関係」「学級との関係」「承認感」へ有効に作用し、結果が全体的に右上に推移したことから、抽出児童4名の振り返り得点が上昇したことなどから、本実践は、「親和型」の学級集団の育成に有効であったと考える。河村（2012）の提唱する学級の状態は、それを基盤として実践を行うことで、有効性を発揮した。

## 11 不登校児童の存在と学級の「親和型」への課題

本実践で明らかになったように、不登校児童がいる状態でも、WEBQUの結果は「親和型」の学級状態となった。前述の通り、河村（2012）は、学級の問題を自分たちで解決でき、児童生徒が自他のために協力できる状態を自治的な学級、すなわち学習に理想的な「親和型」の学級としている。このような学級は児童生徒の温和な相互作用の下で成立すると考えるが、本実践における抽出児童Eのように、学級集団に馴染むことが難しい不登校傾向の児童を含めて捉えていない場合、果たして「親和型」と呼べるのだろうか。抽出児童Eにとって他の児童らが目標に向かって取り組む状態が、重圧になっていたとも考えられる。

本研究における実践を学級全体に向けて行いながら、抽出児童Eのような不登校傾向の児童にも、自分の実状に合わせた目標を設定して取り組めるような個別の対応を行っていくことが求められる。不登校傾向の児童を包括的に包み込むような状態を達成した「親和型」の学級集団こそ、「真」の親和型学級集団と言えるのではないだろうか。

個別の支援や、それに伴う学級経営の方策については、新たな実践を通して考えていかなくてはならない。

## 引用参考文献

- 1 文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別活動編』, 2018年, 12-21pp
- 2 河村茂雄『学級集団づくりのゼロ段階』図書文化, 2012年, 16-37pp
- 3 河村茂雄『開かれた協働と学びが加速する教室』, 2022年, 29pp